

2018年 小学校の部 最優秀賞

未来をつなぐ

広島県広島市 幟町小学校 6年

杉田 眞子 (すぎた まこ)

じりじりと突き刺さるような真夏の太陽。今から73年前、いつもと変わらない朝だった。私のひいおじいちゃんは、牛に荷物を乗せ市場に向かう途中、己斐橋のたもとで原爆にあった。一瞬の出来事で、気が付いた時には納屋の下敷きになっていて、必死にはい出して、おびえる牛をつなぎ、何か起こったのかもわからないまま家に引き返したそうだ。

後から分かったことだが、運よく土手が熱風をさえぎり焼けどを負うこともなかった。

しかし、黒い雨にあい、次の日、知り合いを探すために市内に入って知らぬ間に放射能を浴び被爆していた。その為、世を去るまで被爆者手帳を所持していた。私は、ひいおじいちゃんに会ったことはないが、上記の話を語ることがあっても、この本に書かれているような悲惨で目を覆いたくなる事実、原爆を投下したアメリカへの憎しみの言葉を一度も聞いたことがなかったと、私の母が教えてくれた。

なせだろう……脳裏に焼き付いた地獄絵図、知り合いの死、これから自分が白血病になるかもしれないという恐怖に脅かされ生きなきゃいけないのに、恨みつらみを言わなかったのか……私には理解できなかった。

しかし、この8時15分の本を読み進めていくうちに考えが変わっていった。突然、日常を奪われ、地獄絵図のような最悪の状況の中で傷ついた体を引きずりながら歩いた道。自ら生きるか死ぬかの傷を負いながら息子を励まし、時にはしかり「生きなきゃいけん。」と強い信念と息子を思う愛によって、未来へ命をつなぐように導いた父の強さを感じた。そして近所の人、友達、見ず知らずの人。進示の周りには、心の支えとなる人々がたくさんいた。いろんな人の思いやりの心によって、進示は絶望の淵から生きる力をもらったんだと思った。戦争によって、人の心までもは悪に支配されていなかった。

ではなぜ、戦争は起こるのだろうか？

人類共通の敵である、自らの内なる無知、偏見によって引き起こされているのではないかと思う。知らないということは、正しい判断が出来ないということだ。偏見があるということは、広い視野で物事をとらえていないということだ。

私は原爆投下された日のアメリカの反応についてネットで調べることにした。ニューヨークタイムズ紙よれば、トルーマン大統領の発表通りなら32万人の広島市民が犠牲になったことになり、核の時代の扉を開けたことへの恐れについて書いてあるのみだった。

このころ日本でも連合国などの報道規制により、原爆報道（原爆被害の事相や苦しみ）は国内に広く知らされることがなく、援護や医療は立ち遅れていたそうだ。その間、広島

市民を支えたのは、市民自身の地道な取り組みと国内外（米国の民間団体ララ・ケア）だった。戦争で反日感情の残る中、日系アメリカ人が中心となり全米から資金を募り、人種の違いを超えて多くのアメリカ人もそれに応じたという事を初めて知り、驚いた。

どこの国民？の前に、ひとまず個人個人だ。

人種の違いは個人の前ではほとんど意味を持たず、それが国家や権力と結びついた時に悪い力を持つんだということを再認識させられた。

進示さんがこの本で一貫して伝えたかった「許す心」は、人類共通の敵に打ち勝った人間が到達する究極の悟りなのではないかと思う。今となっては本心を聞くことが出来ないひいおじいちゃんだが、もしかしたら進示さんと同じように長い月日をかけ「許す心」に到達したのではないかと思う。

これから私たちは、無知や偏見をなくすために外国の言葉を学び、自分と違った文化、人種の違い、宗教など、違うものを排除するのではなく、学び、知り、理解することから始めなくてはいけない。そして「人を愛し、認め合う」ことで小さな平和が大きな平和へと輪を広げていけるよう、人の考えを聞き自分の考えを話せる大人になる必要があると思った。